

もくじ 煉瓦と足立 1P

教え子に残る豊千里氏の記憶と作品 3P はたらく消防の写生展 4P



(左) 島氷川神社境内 稲荷社



(右) 堀之内氷川神社境内 稲荷社

# 足立史談

第605号

2018年7月15日

足立区立郷土博物館内

足立史談編集局

〒120-0001

東京都足立区大谷田5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

&lt;30-309&gt;



はい！文化財係です。Vol.1

## 煉瓦と足立

### ■はじめに 「文化財とは」

文化財とは、国の定めた「文化財保護法」（昭和二十五年）によると、歴史、芸術、民俗、考古などの分野で学術上価値の高いものをいい、国民的財産として大切に保存し、できるだけ公開して文化的活用に努めなければならないとあります。

これを受け、各地方公共団体も条例を定めており、足立区も「文化財保護条例」（昭和五十六年）を公布しています。条例では、区にとって重要な資料を区の文化財として登録し、とくに重要なものを区の「指定文化財」としています。現在、区では、一〇五〇件の文化財を登録・指定しています。

法や条例で定められた狭義の文化財の他にも、先人の営みによって生まれ出されたものは全て広義の文化財



加賀町会館敷地内の山王社

であることが再確認できました。そこで、第一回目となる今回は、足立区と煉瓦の関係についてご紹介します。足立区はかつて煉瓦造りが盛んな土地でした。

といえます。文化財は、区民共有的貴重な財産として活用し、後世に守り伝えていかなければなりません。しかし、残念ながら、失われていく文化財も存在します。文化財係では、より多くの文化財を活用し、後世に伝えていくため、区民の方から、これまで知られていなかつた文化財の情報や、路傍で風雨にさらされていいる文化財の現状などについての情報を収集し、調査や保護を進めています。「はい！文化財係です。」として、皆様に区内の文化財の魅力をお伝えしていきたいと考えています。

### ■煉瓦と足立区

今年三月二十七日

に、元宿堀稻荷神社（もとじゆくぜきいなりじんじゃ・千住桜木一一五十五）の氏子の方から文化財係に調査依頼があり、同社の調査を実施しました。この調査の際に、同社が煉瓦

（れんが）で造られた珍しい神社

であることが再確認できました。

そこで、第一回目となる今回は、

足立区と煉瓦の関係についてご紹介します。

隅田川沿いの土壤が煉瓦作りに適した粘土質のへな土や荒木田土（あらきだつち）だったこと、工場で出来上がった煉瓦を大消費地である東京中心部へ運搬するのに隅田川の水運が便利だったことなどがその理由です。煉瓦は、幕末に日本へ入ってきましたが、そして、日本が明治という新時代を迎えると、文明開化を象徴する西洋風の建物の材料として好まれ、増産が図られました。明治二十年代（一八八七～九六）には、区内に十五ヶ所もの煉瓦工場があつたといいます（大正五年版『南足立郡誌』）。

もとは花畠にあり、現在は都市農業公園（鹿浜一～四四一）に移築されている区の指定文化財「旧和井田

家住宅（母屋）（きゅうわいだけじゅうたく（おもや）」は、玄関先に煉瓦が敷き詰められており、煉瓦造りの竈（かまど）もあります。和井田家の当主だった和井田健次郎氏は、花又帝國煉瓦の役員を務め、京城（ソウル）で煉瓦造りの指導を行つたりもした人物でした（※花又は、明治二十二年から花畠となりました）。

また、区の文化財に未登録ですが、千住の赤門寺として名高い勝専寺（千住一一一）にも、見事な煉瓦造りの本堂と煉瓦塀があります（仏像などは登録されています）。こうして文化財は、足立区がいかに煉瓦と密接な関係にあつたかを現在も伝え

続けています。

しかし、大流行した煉瓦は、大正十二年（一九二三）に発生した関東大震災によって壊滅的打撃を受け、衰退の一途をたどることになります。

### ■足立区の煉瓦製の祠

区内には煉瓦で出来た珍しい祠（ほこら）があることは知られています。堀之内氷川神社（堀之内一～七一四）、堀之内一丁目地先（堀之内一～十一）、島氷川神社（鹿浜二一二一八一四）、加賀町会館（加賀二一六）の四ヶ所にそれぞれひつそりと鎮座していますが筆者が現地調査を行つた平成三十年五月現在、堀之内一丁目地先の祠は、無くなっています。

さて、元宿堰稻荷神社の煉瓦造りの祠については、昭和四十四年（一九六九）、本誌上において高橋直二氏がすでに紹介していました（『足立史談』一七号）。

明治のはじめ頃、元宿堰に堰を設立史談

御堂を造り、見つかった石を祀ることにしました。石を祀った後は、工事が順調に進み、元宿堰が完成したそうです。そして、この祠こそが元宿堰稻荷神社の始まりだということにしました。石を祀つてから元宿堰稻荷神社は工事が順調に進んだことから、出世稻荷として信仰を集めたそうです。以上が、高橋氏によつて紹介された内容です。

あらためて、元宿堰稻荷神社の社殿を見てみると、御神体を祀る本殿の部分が煉瓦造りです。大きさは現存する他の三ヵ所の祠とは

同じ大きさで、まさに小さな御堂です。ややわかりにくいですが、写真のように、祠を覆うようにして木造のことになります。

このように、神社に煉瓦が用いられる事例は確認できますが、御神体を祀る本殿や祠に煉瓦が用いられる事例は、全国的に見ても珍しいとみられます。



千住元宿堰稻荷神社 本殿

けることになり、宮城村（足立区宮城）の下川氏が工事を請け負うことになりました。しかし、工事は難航し怪人が続出します。ある夜、下川氏の夢枕に一匹の狐が現れ「土手下にいる私をまつてくれ」と頼みます。すると翌日、土中から田中稻荷（本木北町一四一三）の石が見つかつたので、下川氏は、堰に使つている煉瓦と同じ煉瓦を使つて小さな御堂を造り、見つかった石を祀ることにしました。石を祀つた後は、工事が順調に進み、元宿堰が完成したそうです。そして、この祠こそが元宿堰稻荷神社の始まりだということにしました。石を祀つてから元宿堰稻荷神社は工事が順調に進んだことから、出世稻荷として信仰を集めました。以上が、高橋氏によつて紹介された内容です。

あらためて、元宿堰稻荷神社の社殿を見てみると、御神体を祀る本殿の部分が煉瓦造りです。大きさは現存する他の三ヵ所の祠とは同じ大きさで、まさに小さな御堂です。ややわかりにくいですが、写真のように、祠を覆うようにして木造の

拝殿が造られており、煉瓦造りの祠の露出している部分は後方のみです。そして、この煉瓦を造つた下川氏は、下川馬次郎氏です。同氏は、明治八年に煉瓦工場の下川工場を創設し、明治十年には、内務卿大久保利通の主導する第一回内国勧業博覧会に煉瓦を出品し、国から褒状をうけています。まさに足立の煉瓦の中心人物でした。

元宿堰稻荷神社をはじめとした足立区の煉瓦造りの祠は、こうした足立区の煉瓦産業と密接に関係した文化財と言えるのです。

### ■煉瓦と神社

同じように、北区にある船方神社には煉瓦造りの神輿蔵がありますし、豊島区には戦後に造られた煉瓦造りの小城稻荷神社があります。また、全国的にみると、石川県金沢市の尾浦神社は、神門や玉垣（玉垣）に煉瓦を用いています。大森鳥見神社も玉垣が煉瓦造りです。群馬県太田市の八坂神社も参道が煉瓦敷となっています。

このように、神社に煉瓦が用いられる事例は確認できますが、御神体を祀る本殿や祠に煉瓦が用いられる事例は、全国的に見ても珍しいとみられます。

近年、日本の近代化に貢献した幕末から第二次世界大戦期までの遺産に注目が集まつており、煉瓦造りの

建造物も、いつそう注目されるようになっています。当区に残された祠も、近代化の過程で増産された西洋由来の煉瓦が、神社という日本固有の建造物に使われているという点で歴史的に重要なものであるといえます。

■おわりに 今回ご紹介した煉瓦造りの祠などは、区の文化財としての登録はされていませんが、貴重な文化財であることに変わりはありません。文化財係ではこうした未登録の文化財も含めて、今後、皆様にいろいろな区内の文化財の魅力をお伝えしていきたいと思っていますので、ご期待ください。

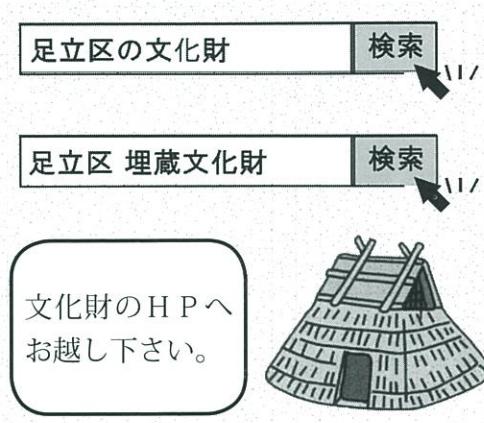
(文化財係 学芸員 佐藤貴浩)

## 足立区の文化財

HPもご覧下さい!

ぶ地中に埋蔵されている文化財や遺跡があると想定される地域については、包蔵地として紹介しています。

◆文化財係 電話 (03-3880-5984)



文化財のHPへ  
お越し下さい。

西新井の教員画家、豊千里<sup>(2)</sup>

教え子に残る  
豊千里氏の記憶と作品

小林 優



『足立史談』第六〇三号(平成三十一年五月発行)に掲載した、西新井小学校の教員画家、豊千里(ゆたかせんり)、一九〇一(八四)氏についての詳しい説明や画像の掲載を始めました。これから、充実した楽しい貢となるように工夫を重ねていただいている四八八件を一覧表で紹介しています。

今年度より、それぞれの文化財についての詳しい説明や画像の掲載を始めました。これから、充実した楽しい貢となるように工夫を重ねていたします。

また、遺跡など、埋蔵文化財とよお聞かせ頂き、また各人の所蔵す

る豊氏の経歴については、「足立史談」第六〇三号掲載の拙稿に詳しいですが、戦後の昭和二十一(一九四六)年に西新井小学校の図工主任として着任した教員であり、また、生徒たちの指導に従事する傍ら官展(新文展・日展)や「大潮会」などの美術団体に作品を出し、中央画壇で活動した洋画家でもあった人物です。足立区の成人学校などでも講師を務め、昭和三十六(一九六一)年に西新井小学校を定年退職して後は、西新井五丁目にアトリエを構え、昭和五十九(一九八四)年に没するまで画家として制作を継続しつつ、多くの門人を育成しました。

今回お話を伺うこ

とが出来たのは、豊氏が着任した昭和二十一年当時に、西新井小学校で三、四年の各学年に在籍していた四名の方々



図1 豊千里《蘇鉄》昭和36(1961)年  
水彩・色紙 川井トヨ子氏蔵 当館保管

『足立史談』第六〇三号(平成三十一年五月発行)に掲載した、西新井小学校の教員画家、豊千里(ゆたかせんり)、一九〇一(八四)氏についての説明とその出自は、豊氏が着任した昭和二十一年当時に、西新井小学校で三、四年の各学年に在籍していた四名の方々

る豊氏の作品を調査する機会を頂きました。今回はその成果をもとに第六〇三号の続編として、教え子の方々が語る豊氏の記憶と、新たに確認された作品を紹介します。

■教え子に残る教員、豊先生の記憶 豊千里氏の経歴については、「足立史談」第六〇三号掲載の拙稿に詳しいですが、戦後の昭和二十一(一九四六)年に西新井小学校の図工主任として着任した教員であり、また、生徒たちの指導に従事する傍ら官展(新文展・日展)や「大潮会」などの美術団体に作品を出し、中央画壇で活動した洋画家でもあった人物です。足立区の成人学校などでも講師を務め、昭和三十六(一九六一)年に西新井小学校を定年退職して後は、西新井五丁目にアトリエを構え、昭和五十九(一九八四)年に没するまで画家として制作を継続しつつ、多くの門人を育成しました。

豊氏は図工教員として各学年で教鞭をとりましたが、当時、授業で使用した基本画材は墨でした。豊氏の授業では、これに学年によってケレヨン、水彩絵の具などを併用して人物などの静物や樹木などの景物を写し描き、さらに学校にほど近い土手などに行き写生を行ったと言います。さらにこういった授業の中で、豊氏は西新井という生徒たちの暮らす地域の特徴をよく活用したようです。總持寺(西新井大師)で催される縁日で境内に屋台や人が混み合う様子を、記憶を頼りとして横長の絵巻に

です。戦時下の疎開から戻った彼らは、着任したばかりの豊氏とつて最初の生徒となりました。

描くということも行つたことを、教え子の方が記憶しています。

そしてまた、そういう技術手法の立場を活かし、画壇の現場を生徒に見せることもありました。豊氏が主な活動の場とした、美術教員を中心とする美術団体「大潮会」の団体展にはしばしば生徒を見学に連れて行き、会場となる上野の東京都美術館で展示を見せるほか、時によつては出展作品の審査室なども見学させたと言います。校内での実技指導に

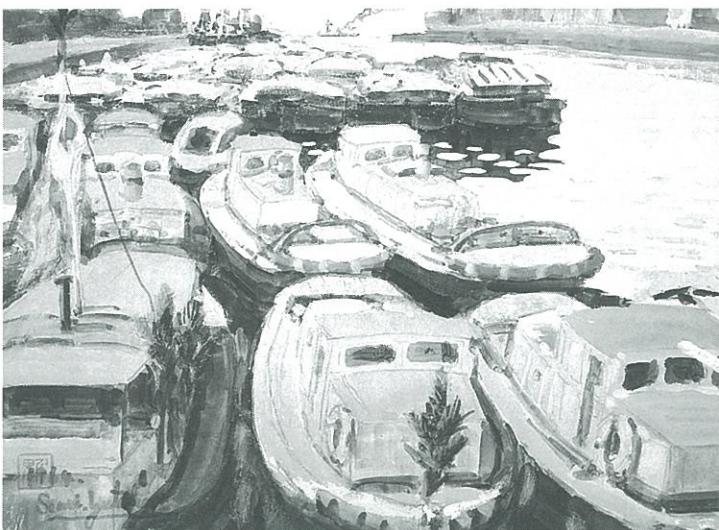


図2 豊千里《正月の憩い》昭和39(1964)年水彩・紙  
川井トヨ子氏蔵 当館保管

豊氏は、退職後に豊氏が開いた個展などにも足を運び、また結婚に際しては豊氏が仲人を務めるなど、卒業後も恩師である豊氏を慕い、深く親しみ続けました。そうした親交を通じて、幾つかの豊氏の作品がその手元に残ることなつたのです。

『蘇鉄(そてつ)』(図1)は、そのような川井氏の元に残る豊氏の作品で、豊氏が定年退職に際して制作した一点です。縦二十七センチ、横二十四センチの色紙に、蘇鉄の生える陸地を近景に、船行

留まらず美術界の現場も学びの場として、広く「美術」の世界を教授しようと、豊氏の教育姿勢が垣間に見えるようです。

■ 教え子の元に残る豊氏の作品 热心に指導に取り組んだ豊氏は、生徒にとつて記憶に残る親しむべき先生だったのでしよう。豊氏の着任当時に西新井小学校四年生で、今回お話を伺った教え子の一人である川井トヨ子氏(元鹿浜小学校教員、学童疎開を語る会会員)は、卒業後も豊氏との親交を持ち続けた一人です。六年生までの三年間に渡り

豊氏の指導を受けた川井氏は、豊氏と一緒に船を伸す飢餓のときは、かてとなる。そつ好きです「私は」と記されています。還暦と退職という一つの区切りを迎える中、九州奄美大島に生まれ育つた豊氏が親しんだ蘇鉄の在り方に、自身もまたそのように在りたいとい

う思いを重ねたものでしようか。また、正月飾りとしての松の葉を舳先につけた船舶を題とした『正月の憩い』(図2)は、額裏に貼られた豊氏直筆の札に「祝御結婚」とある通り、川井氏の結婚に際して祝いとして豊氏から贈られた作品です。作品裏には「第23回創元会出品作品原画」と記されており、豊氏の所属していた美術団体「創元会」の団体展への出展作の構想元となる作品であることが示唆されていますが、豊氏は同年の第七回日展にも『憩い』と題する作品を出展しており、あるいはその作品の元ともなっているかと推測されます。前述の通り、川井氏の結婚に際しては豊氏が仲人を務めており、まさしく恩師である豊氏と教え子の深い親交を如実に物語る一

点と言えるでしょう。

豊氏と川井氏の親交は、豊氏の没時まで続きました。教員として深く地域に根差した豊氏の作品は、このように教え子はじめ地域の人々の元にも残されていったのでしょうか。

今回、ご厚意により戦後足立の教員画家である豊氏についての記憶を拝聴する機会に恵まれました。博物館では今後も豊氏はじめ、地域の芸術家や文化に関する調査を継続していくきます。ぜひ情報をお寄せ下さい。

(当館学芸員)

夏休みは親子で郷土博物館へ!  
**はたらく消防の写生展**

会期: 8月1日(水)~26日(日)  
東京消防庁の主催で毎年開催されている「はたらく消防の写生会」も今年で第六十八回目を迎えました。郷土博物館では、写生会に寄せられた足立区内の八つの小学校の生徒による作品、九十五点を展示します。消防車と消防署員たちの姿を一生懸命に描いた子供たちの力作の数々をご覧に、ぜひ足をお運びください。

（展示される小学校）

東加平小学校／東渕江小学校／中川小学校／花畠小学校／花保小学校／辰沼小学校